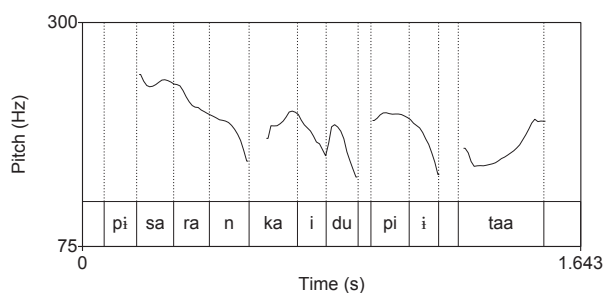


## 宮古伊良部集落方言の疑問文イントネーション

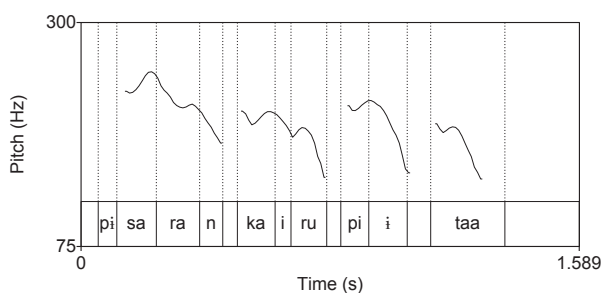
衣畑智秀

## 1 はじめに

次の図は、宮古伊良部集落の方言における文のピッチ曲線である。(1-a)の図では、文末の最終モーラにかけて上昇が見られるのに対し、(1-b)の図では、最終モーラにかけて下降が見られる。



(1-a)



(1-b)

これらをピッチ曲線でのみ判断すると、多くの日本語話者は、左が疑問文、右が平叙文と判断するのではないだろうか。しかし、実際はその逆で、(1-a)が平叙文、(1-b)が疑問文のピッチ曲線である。それぞれの文を次に示す。

- (1) a. pisara=nkai=du pii-taa.  
 平良=All=Foc.Dec 行く -Past  
 「平良に行った。」
- b. pisara=nkai=ru pii-taa.  
 平良=All=Foc.Q 行く -Past  
 「平良に行った？」

この方言では、平叙文に *du*、肯否疑問文に *ru*、疑問詞疑問文に *ga* がそれぞれ係助詞として用いられる。よって、(1-a)では *du* が用いられているので平叙文であり、(1-b)では *ru* が用いられているので疑問文である。そして(1)では、平叙文では文末が上昇しているのに対し、疑問文では下降しているのである。

このように、疑問文の文末が下降するのは、木部 (2010) によると日本語諸方言でも珍しくないと言う。以下に木部 (2010) からの引用を挙げる。

東京方言などでは一般に、質問文の文末は上昇調になるので、下降調で質問を表すこのようなイントネーションは特殊なように思われがちだが、諸方言のイントネーション

ンを観察してみると、質問文でも文末が上昇しない方言は、結構ある。「日本語音声」CDの中から拾ってみると、青森県八戸市、岩手県宮古市、富山市、新潟県佐渡、山口県見島、佐賀市、熊本県天草、長崎市、宮崎県都城市、鹿児島県屋久島、鹿児島県喜界島などの方言がそうである。また、科研費木部代表 (2009) にも、質問文が下降調で現れるデータがかなりある。(p. 1-2)

しかし、木部 (2010) では平叙文のイントネーションに触れていないので、この「下降調」が疑問文であるために下降しているのか、それとも単に平叙文の下降と変わらないということなのかは分からない。

むしろ、典型的に珍しいと言われるイントネーションは、平叙文に上昇を用いるのに対し疑問文に下降を用いるという、通常の平叙文・疑問文の音調とは反対になるタイプのものである。このようなタイプのイントネーションは、79の言語をサンプルとした Ultan (1978) では、Chitimacha 語 (孤立語、北アメリカ) にしか明確には認められていない<sup>1</sup>。

本稿では、この典型的に珍しいイントネーションを持つように見える、宮古伊良部集落方言について、調査結果を報告するとともに、なぜ疑問文に下降が見られるようになったのかについて考察を行う。

## 2 宮古伊良部集落方言について

伊良部集落は、沖縄県宮古島市伊良部島の中の集落の一つである。伊良部島は、宮古本島の北西に位置し、伊良部、仲地、国仲、長浜、佐和田、池間添、前里添の七つの集落からなっている。このうち、島東部に位置する池間添、前里添 (あわせて佐良浜) は池間島からの分村であり、池間方言に属する。その他の五つの集落で話される方言を、ここでは「伊良部方言」と呼ぶが、その五つの集落も方言差が小さくはなく、伊良部・仲地方言、国仲方言、長浜・佐和田方言に分類される (Shimoji 2008、富浜 2013)。本稿は、このうちの伊良部・仲地方言についての報告となるが、現在までのところ、伊良部集落についてしか調査を行っていないため、この方言を「伊良部集落方言」と呼ぶ。

伊良部集落方言の音調に関する先行研究としては、平山他 (1967) が、「崩壊一型のアクセント」(p. 31) としている他には研究が見られない。また、近隣の長浜方言については、Shimoji (2009) がフットによるリズムの交替があるとしているが、本方言でも、一定の拍数以上になると、そのような交替が見られるようである。

- (2) a. famiriimaato [HLLLHHL] (ファミリーマート)
- b. amifuipammai [LLLLHHHL] (非常時の食料)

<sup>1</sup> Ultan (1978) によると、Fanti 語、Grebo 語 (いずれもニジェール・コンゴ語族、西アフリカ) にも疑問文に下降イントネーションが見られるが、平叙文のイントネーションは分からないようである。

しかし、その実現形は必ずしも長浜方言と同じではなく<sup>2</sup>、詳しいことは分かっていない。

### 3 伊良部集落方言の文末イントネーション

#### 3.1 調査方法

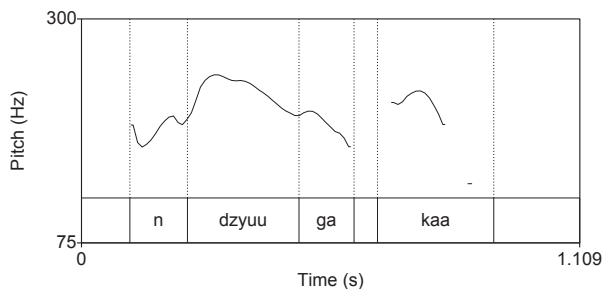
調査は、2015年8月18日に、1930年生まれの話者（男性）に、日本語で提示した文を方言になおしてもらおうという形で行った。提示した文には、miii（見る）、koo（買う）、pii（行く）、niv（寝る）、kafu（書く）、yum（読む）の六つの動詞を用い、それぞれの平叙文、疑問文、命令文、禁止文を作成して尋ねた。また、平叙文・疑問文は、それぞれの非過去と過去の文を、さらに、疑問文はそれぞれの疑問詞疑問文、肯否疑問文を作成した。その結果得られた例文数は、話者から提示があったものを含め71パターンとなった<sup>3</sup>。

例文は、話者に3回以上読み上げてもらい、marantz PMD661（録音機）及びAKG C520（マイクロフォン）を使って録音した。サンプルレートは48kHz、量子化ビット数は24bitで、WAVEファイルとして記録している。

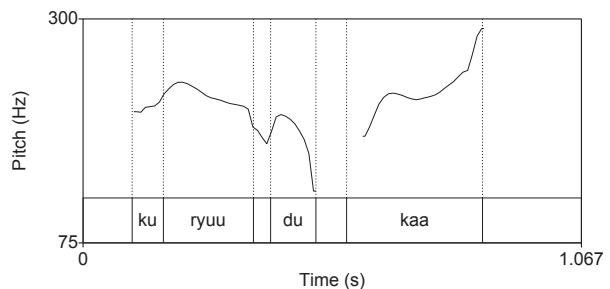
#### 3.2 疑問文と平叙文

まず、非過去の疑問文と平叙文のペアから示していく。(3)は疑問詞疑問文(3-a)とその答えとなる平叙文(3-b)のペアである。下に示したように、疑問文では最終モーラにかけて下降が見られ、平叙文では上昇が見られる。

- (3) a. ndyu=u=ga kaa?  
 どれ=Acc=Foc.Q 買う.Vol  
 「どれを買う？」
- b. kuryu=u=du kaa.  
 これ=Acc=Foc.Dec 買う.Vol  
 「これを買う。」



(3-a)



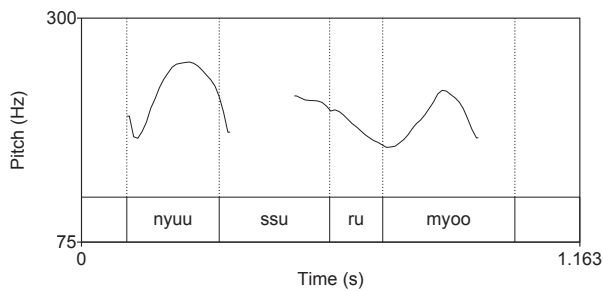
(3-b)

<sup>2</sup>たとえば、Shimoji (2009)によると、(2-a)は[HLLLLLL]として実現する。(2-b)についてはShimoji (2009)は長浜方言で[LHLLHLLL]として実現するとしており、伊良部集落方言もpammaiのmaの下がり目が緩やかなため[H]に聞こえるが、maiは/LL/として解釈できるという指摘を頂いた（下地理則氏、個人談）。

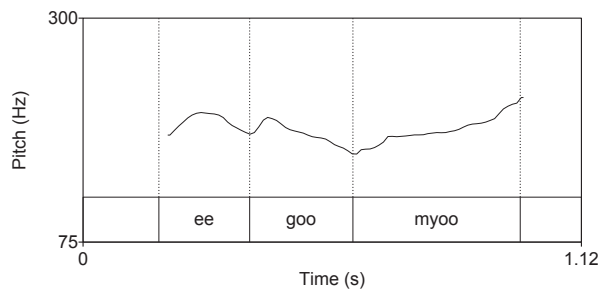
<sup>3</sup>同じ文でも異なるイントネーションで発音された場合が2例あり、それは異なるパターンとして数えた。

次は、非過去の肯否疑問文 (4-a) とその答えとなる平叙文 (4-b) のペアである。下図のように、やはり疑問文は下降し、平叙文は上昇する。

- (4) a. nyuus=su=ru myoo?  
 ニュース=Acc=Foc.Q 見る.Vol  
 「ニュースを見るの？」
- b. eego=o myoo.  
 映画=Acc 見る.Vol  
 「映画を見るよ。」



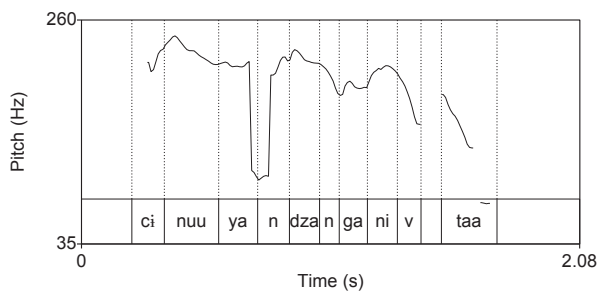
(4-a)



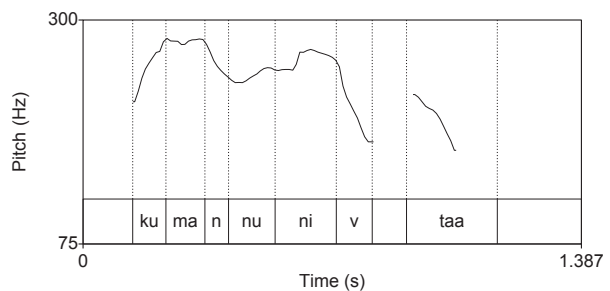
(4-b)

次に、過去の疑問文と平叙文の組を挙げる。(5-a) は疑問詞疑問、(5-b) は肯否疑問、(5-c) はそれらに対する答えとしての平叙文である。なお、(5-b) において、係り助詞は直前の助詞 *n* に同化し、*nu* として現れている。

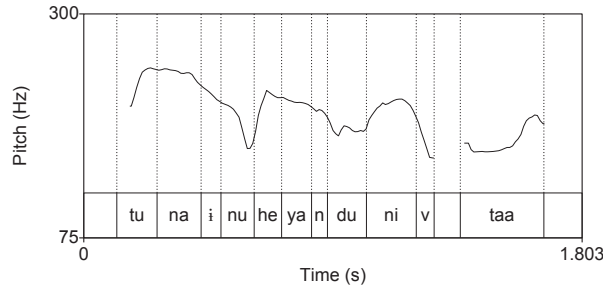
- (5) a. cinuu=ya ndza=n=ga niv-taa?  
 昨日=Top どこ=Dat=Foc.Q 寝る-Past  
 「昨日はどこで寝たの？」
- b. kuma=n=nu niv-taa?  
 ここ=Dat=Foc.Q 寝る-Past  
 「ここで寝たの？」
- c. tunai=nu heya=n=du niv-taa.  
 隣=Gen 部屋=Dat=Foc.Dec 寝る-Past  
 「隣の部屋で見るよ。」



(5-a)



(5-b)

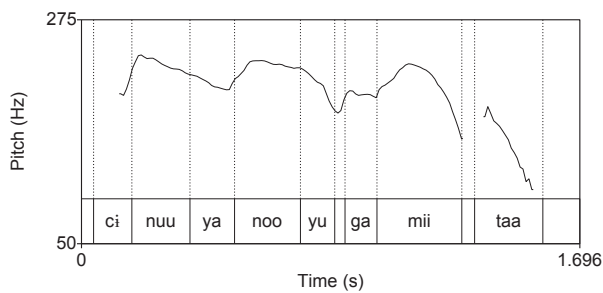


(5-c)

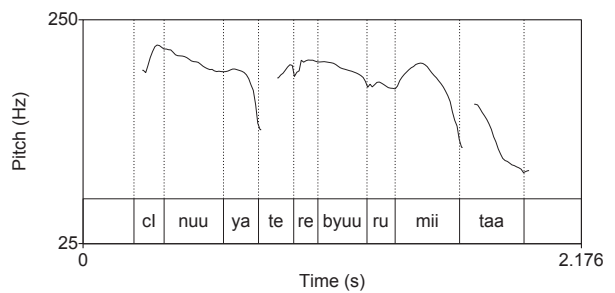
これらの図で明らかなように、疑問文は、疑問詞疑問であれ肯否疑問であれ下降し、平叙文は上昇している。

もう一組、過去の疑問文と平叙文の組を上げる。(6-a) が疑問詞疑問、(6-b) が肯否疑問、(6-c) がそれに対する答えの平叙文である。

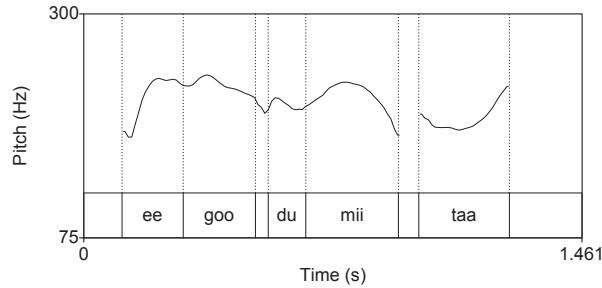
- (6) a. cinuu=ya noo=yu=ga mii-taa?  
 昨日 = *Top* 何 = *Acc=Foc.Q* 見る - *Past*  
 「昨日は何を見たの？」
- b. cinuu=ya terebyu=u=ru mii-taa?  
 昨日 = *Top* テレビ = *Acc=Foc.Q* 見る - *Past*  
 「昨日はテレビを見たの？」
- c. eego=o=du mii-taa.  
 映画 = *Acc=Foc* 見る - *Past*  
 「映画を見たよ。」



(6-a)



(6-b)

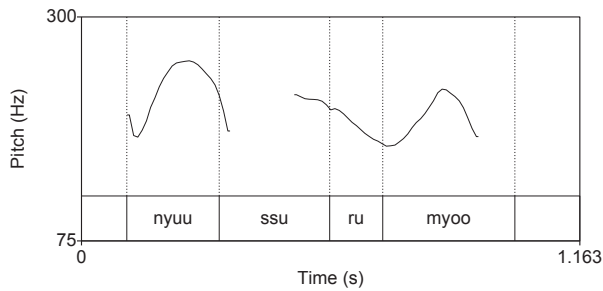


(6-c)

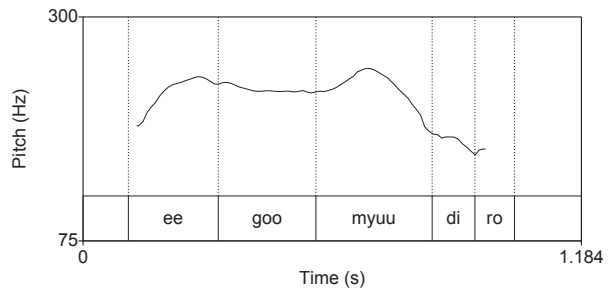
やはり疑問文は下降し、平叙文は上昇する。

以上のような疑問文が下降し、平叙文が上昇する、という音調は、助詞の有無や位置に関係ない。たとえば、肯否疑問文は、疑問を表す助詞 *ru* が文中に来ることもあれば、(7-b) のようにその異形態が *ro* として文末に現われることもある。しかし、どちらに助詞が現れても文末イントネーションは下降する。

- (7) a. nyuus=su=ru myoo?  
 ニュース=Acc=Foc.Q 見る.Vol  
 「ニュースを見るの？」
- b. eego=o myuu-di=ro?  
 映画=Acc 見る-Vol=Q  
 「映画を見るの？」



(7-a)



(7-b)

また、平叙文の *du* は、焦点があれば (8-a) のようにその要素に付くが、(8-b) のように現れないこともある。また、係助詞 *du* が現れず、(8-c) のように文末の助詞が出る場合もある。しかし、いずれの場合も文末は上昇する。

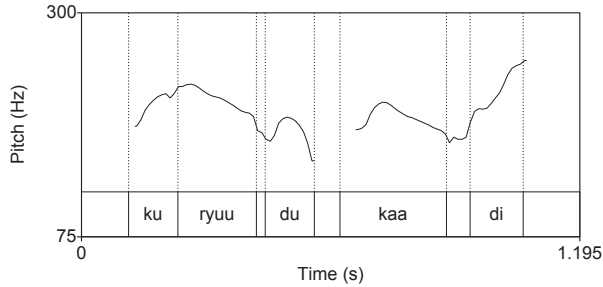
- (8) a. kuryu=u=du kaa-di.  
 これ=Acc=Foc.Dec 買う-Vol  
 「これを買うよ。」
- b. kuryu=u kaa-di.  
 これ=Acc 買う-Vol

「これを買うよ。」

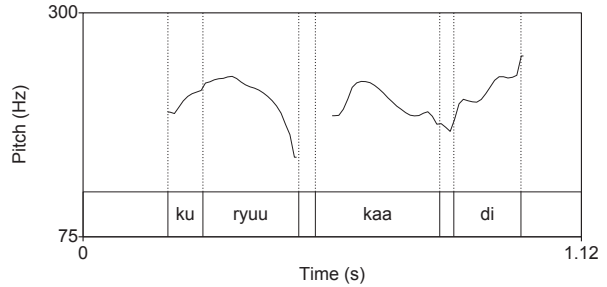
c. p̄isara=nkai pira=ddoo.

平良=All に行く=SPF

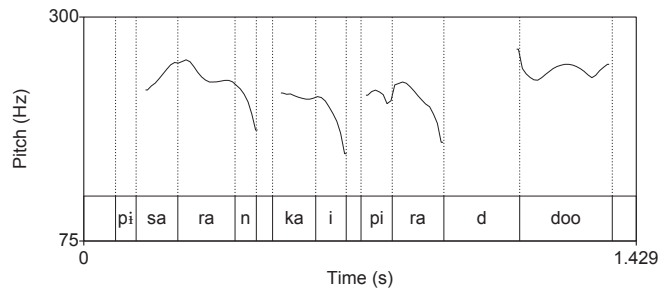
「平良に行くよ。」



(8-a)



(8-b)



(8-c)

ただし、(8-c)の上昇は最終音節の中で見られず、動詞語幹末から助詞 *doo* に掛けて大きく上昇している。これは、*doo* の持つ音調のためである可能性もある。

### 3.3 命令文と禁止文

この方言では、命令文や禁止文も文末で上昇が見られる。(9-a)は命令の例、(9-b)は禁止の例である。どちらも最終モーラで上昇しているのが分かる。

(9) a. p̄isara=nkai piri.

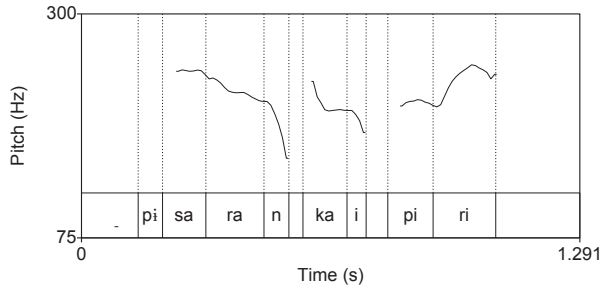
平良=All 行く .Imp

「平良に行け。」

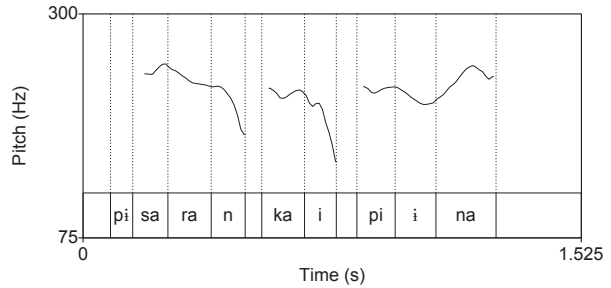
b. p̄isara=nkai pii=na.

平良=All 行く =Proh

「平良に行くな。」



(9-a)



(9-b)

### 3.4 イントネーションの分布と例外について

以上では、伊良部集落方言における、典型的な疑問文、平叙文、命令文、禁止文のイントネーションをそれぞれ見てきた。ここで、今回の調査で得られた全 71 パタンの文末イントネーションの用例数をまとめると、次の表 1 のようになる。

表 1 音調の分布

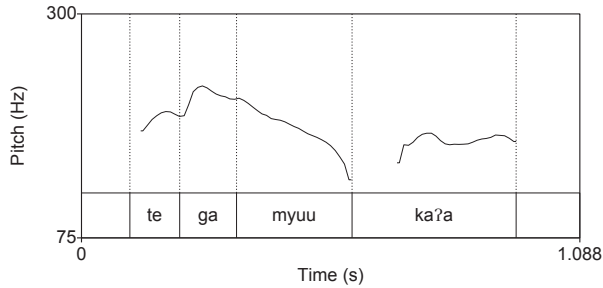
	下降	上昇	平板	計
疑問詞疑問	14	0	0	14
肯否疑問	20	0	0	20
平叙	3	17	4	24
命令	0	5	1	6
禁止	1	5	1	7

この表から分かるように、疑問文においては全て文末で下降が見られ、例外となるものはなかった。しかし、平叙文、命令文、禁止文は一般的傾向として上昇が見られるものの、一部平板になるものや、下降するものも見られた。

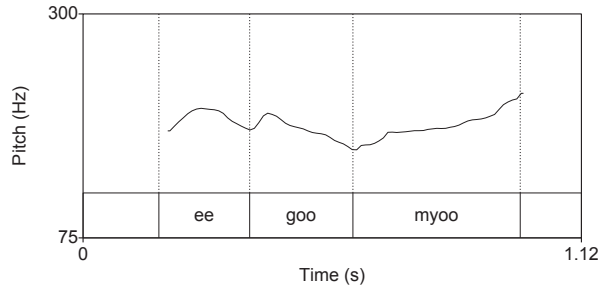
このうち、文末が平板になるものは一定のパターンがある。すなわち、文末の 2 モーラが高く、その前の 2 モーラが低く発音され、文末 4 モーラは [LLHH] として実現する。(10-a) がその例である。

- (10) a. tegamyu=u kaɸa.  
 手紙=Acc 書く.Vol  
 「手紙を書くよ。」
- b. eego=o myoo.  
 映画=Acc 見る.Vol  
 「映画を見るよ。」





(10-a)

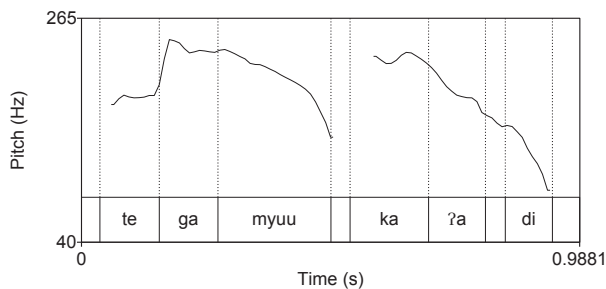


(10-b)

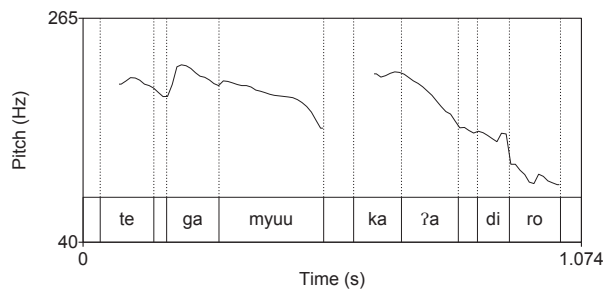
(10-a) では、tega までが高く、その後になり始め、myuu と ka?a の間に大きな上昇が見られる。対して (10-b) は、(4-b) にも挙げた上昇のパターンである。この場合も最初の 2 モーラ ee までが高く、そのあと goo で下降していくが、myoo 中の最終モーラにかけて上昇が見られる。このように、最後の 2 拍が高く平板になるものと、最終モーラにかけて上昇が見られるものの 2 種類の音調が見られたが、これらがどのような条件によって現れるのかはまだ分かっていない。

最後に、例外的に見られる下降について述べる。禁止文に見られた下降は、助詞 *yoo* の音調によってもたらされたものであった。つまり、(9-b) のように、禁止の *na* までは上昇するが、その後終助詞 *yoo* を付けると、*yoo* 中で急激に下降するのである。これに対し、平叙文に見られた下降については、どういう条件で起こるのかはよく分かっていない。(11-a) は平叙文にも関わらず、下降が見られた例である。文末に *ro* が付き、疑問として下降している例 (11-b) と対比させて示す。

- (11) a. tegamyu=u ka?a-di.  
 手紙=Acc 書く-Vol  
 「手紙を書くよ。」
- b. tegamyu=u ka?a-di=ro.  
 手紙=Acc 書く-Vol=Q  
 「手紙を書くの？」



(11-a)



(11-b)

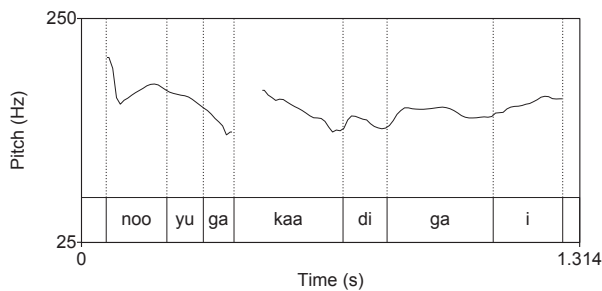
どちらも文末で di までと同じように下降していくが、疑問文の (11-b) の方は、*ro* でさ

らに下降しているように見える。しかし、この下降は助詞によるものか、疑問文という文の性質によるものかは分からない。それを確かめるためには、文中に *ru* が現れ、文末は平叙文と同じように *kaɸadi* で終わる疑問文を調べなければならない。しかし、現在そのデータが得られておらず、今後の課題とせざるをえない<sup>4</sup>。

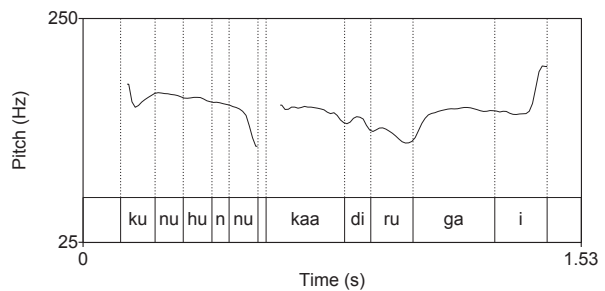
#### 4 なぜ「下降」するのか？

これまで、伊良部集落方言では、平叙文が一般的に上昇するのに対し、疑問文が下降することを見てきた。しかし、実は、全ての疑問文がこの方言で下降するわけではない。同じ疑問文でも、自問の場合は以下のように文末で上昇する<sup>5</sup>。

- (12) a. noo=yu=ga kaa-di=gai?  
 何=Acc=Foc.Q 買う-Vol=Q  
 「何を買おうかな？」
- b. kunu hun=nu kaa-di=ru=gai?  
 この本=Acc=Foc.Q 買う-Vol=Q=Q  
 「この本を買おうかな？」



(12-a)



(12-b)

よって、伊良部集落方言で文末が下降するのは質問の場合だけであり、「下降」を、質問に用いられる、という以上に、細かい機能的観点から説明することは難しい。

しかし、この「質問」にしか見られない、ということが、疑問文の表し分けの中では逆に意味を持っていると考えられる。伊良部集落方言の疑問文は、(13-a)(13-b)のように疑問詞疑問に *ga*、(13-c)(13-d)のように肯否疑問に *ru* が用いられて、形態によって疑問詞疑問と肯否疑問を区別している。また、自問には、(13-a)(13-c)に見られるように、*gai* という独自の形態がある<sup>6</sup>。

<sup>4</sup> 筑紫日本語研究会において平叙文の下降と疑問文の下降を比較した際に、木部暢子氏、高山倫明氏からは、疑問文の方が最後のモーラの下降がより高い位置から始まり急激であるとの指摘を頂いた。このときに比較した例は「見た」にあたるもので、*mii-taa* の *mii* の終わり と *taa* の始まりの間に大きなピッチ差が疑問文の方には明確に認められた。しかしそのような違いが広く認められるのかはまだ分かっていない。少なくとも、(11) では、ピッチの急激な変化が疑問文にだけ認められるとは言いにくいように思われる。

<sup>5</sup> 3 節の 1930 年生の話者の例にはピッチ曲線を描くのに適切な機器を用いた音声が無かったため、(12) は別の話者(1924 年生、男性) のデータを用いている。

<sup>6</sup> (13-a) の [ʔ] は、/g/が/a/に挟まれた場合に実現する音声的バリエーションである (富浜 2013 参照)。

- (13) a. ndza=n=ga      pii-taa=ɸai?  
 どこ=All=Foc.Q 行く -Past=Q  
 「どこに行ったかな？」      疑問詞疑問・自問
- b. ndza=n=ga      icci bu-taa?  
 どこ=All=Foc.Q 行く Cont-Past  
 「どこに行ってたの？」      疑問詞疑問・質問
- c. mma=ɸa=ru      sooc=cu asi-taa=ru=gai?  
 おばあ=Nom=Foc.Q 掃除=Acc する -Past=Q=Q  
 「おばあが掃除したのかな？」      肯否疑問・自問
- d. mma=ɸa=ru      sooc=cu asi-taa?  
 おばあ=Nom=Foc.Q 掃除=Acc する -Past  
 「おばあが掃除したの？」      肯否疑問・質問

だとすると、有標の形態が存在しないのは、まさに「質問」の場合だけということになる。その質問を示す有標の形式が「下降」なのではないか。

このことは、宮古諸方言との比較からも支持することができる。実は、宮古諸方言には、疑問文が義務的に下降する方言は、伊良部集落以外には全く見られない。次の表2は、宮古諸方言の文末形式と音調を、筆者が調査した範囲でまとめたものであり<sup>7</sup>、↑、↓、→はそれぞれ「上昇」「下降」「平板」の音調を表す。

表2 宮古諸方言の文末形式と音調

	質問		自問	
	肯否	疑問詞	肯否	疑問詞
佐和田	ru ↑	ga ↑	byaam ↑	garaya
狩俣	ϕ ↑	ϕ ↑	biran →	gana →
島尻	naa ↑	rya →	byaanni ↑	gai ↑
大浦	naa ↑	raa ↑	i ↑	gai ↑
荷川取	na ↑	rya ↑	byaaya ↑	gara ↑
下崎	naa ↑	rya →	byaaya ↑	garaya ↑
野原	na ↑	rya ↑	byai ↑	garai ↑
上地	nuga ↑	ga ↑	byaaira ↑	garai ↑
新里	ϕ ↑	ϕ ↑	byaaya ↑	garaya ↑
伊良部	ϕ ↓	ϕ ↓	gai ↑	gai ↑

<sup>7</sup>ただし、ほとんどが1、2例の例文を確認しただけであり、個々の方言の詳しい実態は今後の調査を待たなければならない。

このように伊良部集落方言だけが質問が下降し、この点で他の諸方言から孤立しているように見える。しかし、伊良部集落方言は全く孤立しているわけではなく、自問に関しては、ほとんどの方言で伊良部集落方言と同じ上昇で発話される。つまり、質問を下降する、という点が他の集落と異なるわけである。ではなぜ、伊良部集落では質問を下降させたのか？表2から読み取れるもう一つの特徴として、宮古諸方言では、質問と自問の区別に加え、疑問詞疑問と肯否疑問も文末の形式によって区別しているという点が指摘できる<sup>8</sup>。しかし、伊良部集落だけは、自問の疑問詞疑問と肯否疑問を *gai* によって、統一している。この統一と並行的に統一したのが、質問の下降音調ではないだろうか。だとすると、伊良部集落方言の「下降」は、質問の文末を統一するという要求からできたものと考えることができる。

## 5 おわりに

本稿では、以下のことを述べた。

1. 伊良部集落方言では、質問を表す疑問文で文末が必ず「下降」する。
2. 伊良部集落方言では、平叙文・命令文・自問疑問文で文末が典型的に上昇する。
3. 伊良部集落方言の疑問文は、疑問詞疑問と肯否疑問がそれぞれ *ga*、*ru*、自問と質問がそれぞれ *gai*、↓(下降) で区別されている。
4. 伊良部集落方言は、疑問の文末形式として、統一的に、自問に *gai* (疑問詞疑問にも肯否疑問にも)、質問に ↓(下降) (疑問詞疑問にも肯否疑問にも) を使う点で、他の宮古諸方言と大きく異なっている。

話者による差はないか、同じ方言とされる仲地方言でも同様のイントネーションが使われるかなどの課題も残されているが、伊良部集落方言が典型的に珍しいタイプの文末イントネーションを持つことは示すことができたと思う。

### グロス略号一覧

Acc 対格	All 向格	Cont 継続	Dat 与格	Dec 平叙	Foc 焦点	Gen 属格
Imp 命令	Nom 主格	Past 過去	Proh 禁止	Q 疑問	SFP 終助詞	Top 主題
Vol 意志	= 接語境界	- 接辞境界				

### 参考文献

- Shimoji, Michinori (2008) "A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language," Ph.D. dissertation, The Australian National University.
- Shimoji, Michinori (2009) "Foot and rhythmic structure in Irabu Ryukyuan," *Gengo Kenkyu* 135: 85-122.
- Ultan, Russell (1978) "Some general characteristics of interrogative systems," in H.,

<sup>8</sup> 大浦方言の肯否疑問の自問には *i* という形挙げているが、他に *beya* という形式も使われる。

Joseph Greenberg ed. *Universals of language*, pp. 211-248, Stanford: Stanford University Press.

木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション—」, 小林隆・篠崎晃一 (編) 『方言の発見—知られざる地域差を知る—』, 1-20 頁, ひつじ書房.

富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』, 沖縄タイムス社.

平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』, 明治書院.

謝辞 本稿の内容に対し、筑紫日本語研究会（第 263 回、2015 年 12 月 28 日、九州大学）ではフロアから貴重なご意見を頂きました。また後日、下地理則氏には、詳細なコメントを頂きました。記して感謝申し上げます。